

日本空間プロジェクト

# Das japanische Haus

照内孝明/ 大谷悠/ 勝又友子

## 目次

### 1. はじめに

- 1-1 東ドイツの抱える問題と可能性
- 1-2 新たなアイデアとしての「日本文化」

### 2. コンセプト - 日本のアイデア：三つの「わ」

- 2-1 循環 - 空間と活動の循環：「まちづくり」
- 2-2 なごみ - 人々を迎え、つながりを生み出す活動
- 2-3 日本 - 日本の空間

### 3. 企画者プロフィール

## 1. はじめに

### 1-1 東ドイツの地方都市

旧東ドイツの地方都市は産業の衰退と人口の流出に起因する様々な問題を抱えており、「縮小する都市 (Shrinking City<sup>1</sup>)」として注目を集めている。これらの都市では、都市内部に多くの空き家や空き地が残されており、この残された空間を活用することで、都市・地域活性化の糸口を探る取り組みがなされている。

ドレスデンでは、都市周縁部の工業地帯に多くの放棄された倉庫や工場がある。近年、これらの空間を用いた新たな試みがなされている。例えば 2007 年に設立されたギャラリーである geh8<sup>2</sup>は、元貨物駅の空間を再利用している。駅舎をそのまま使った用いた独特の空間が特徴で、多くの芸術家が惹きつけられ集まっている。

ライプツィヒでは、ドイツ再統一後に人口流出が顕著になり、市内には数多くの空き屋が残されている。これを受け 2004 年に Haushalten e.v.<sup>3</sup>が設立され、その一環として「Wächthäuser」というプロジェクトが行われている。所有者は設備を整えた後、無料もしくはわずかな賃料で空き屋を貸し出し、借り手は建物を維持する事を条件に、自由に改装を行う事が出来る。今すぐにリノベーションされる事は無いが、取り壊すわけにもいかない状態の空き屋の「Zwischennutzung<sup>4</sup>」に注目したプロジェクトである。市内に残る多くの空き屋が、画期的なアイデアを街に呼び込む契機として活用され始めている。

ゲルリッツ東西ドイツ再統一後、歴史的建造物の保全・改修が進み、現在では多くの観光客が訪れている。しかし観光客は増加しているものの、ゲルリッツに居住する人は減り続けている。この事を受け、ゲルリッツの中心市街地での生活を体験できる「Probewohnen<sup>5</sup>」というプロジェクトが行われた。これは中心市街に近い空き家をリノベーションし、人々に一定期間無料で居住してもらうことで、ゲルリッツの街の本来の豊かさを人々に体験してもらい、街を見直す機会を設けるという取り組みであった。

このように、旧東ドイツで行われている都市再生は新たな局面に入っている。単なる建物の保全・改修に留まらず、空間を活用し地域の活性化につながるような新たなアイデアが重要である。都市に空いた空間が残されている状況は、それまでにない新たな試みが持ち込まれる大きなチャンスでもある。

<sup>1</sup> Oswalt, Philipp [2006], Shrinking Cities, ShrinkingCity (<http://www.shrinkingcities.com>)

<sup>2</sup> geh8 Kunstraum und Ateliers e.V (<http://www.geh8.de/>)

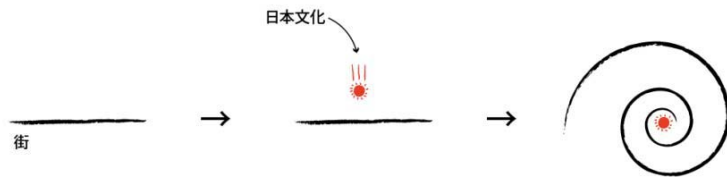
<sup>3</sup> Haushalten e.V. - Wächterhäuser in Leipzig (<http://www.haushalten.org/>)

<sup>4</sup> Zwischennutzung (過渡期利用) とは、人口流出などによって余った建物や屋外空間を、次の用途が決まるまでの間アイデアをもった人々に活用してもらう事で、空間を維持すると共にクリエイティブなアイデアを街に入れ込む契機とする取り組みである。

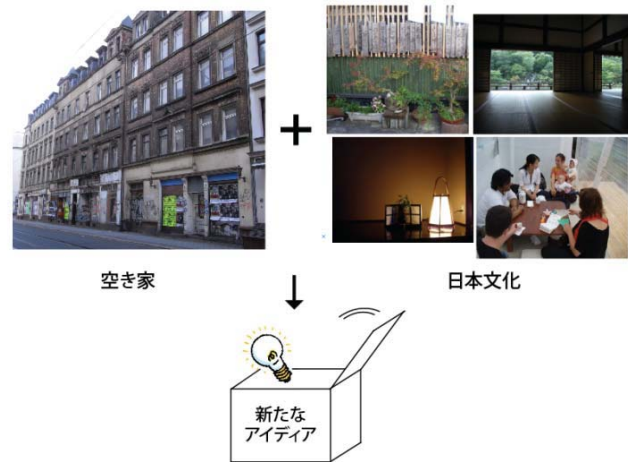
<sup>5</sup> Probewohnen in Görlitz - Görlitz Kompetenzzentrum (<http://www.stadtforschung.com/content/goerlitzwohnen.html>)

## 1-2. 新たなアイデアとしての「日本文化」

本プロジェクトは、東ドイツの街にある空き家に、日本の衣/食/住を総合的に体験できる場所を提案する。手作りの、生きた「日本文化」を人々に体験してもらうことで、ドイツと日本の文化交流にとどまらず、新たな風を吹き込み街と人々に変化を与える事を目標とする。(図1)「日本文化」を新たなアイデアとして用い、これを空き家に入れ込む試みによって、これまで街になかった空間と活動が生み出される。(図2)



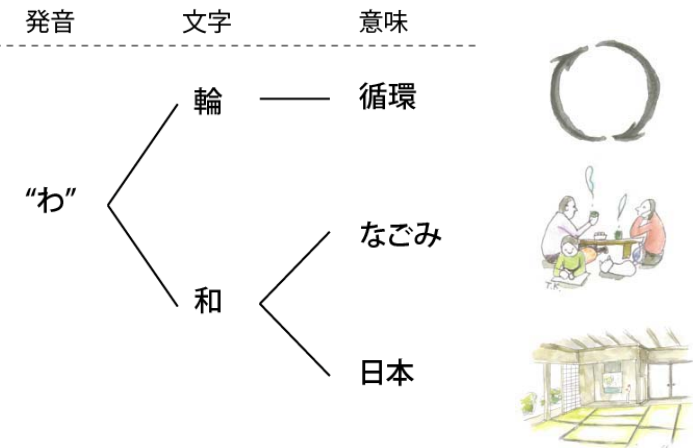
(図1) 街に日本文化を投入することで街に変化が生まれる。



(図2) 街の空き家に日本文化を入れ込む新たな試み

## 2. コンセプト - 日本のアイデア：三つの「わ」

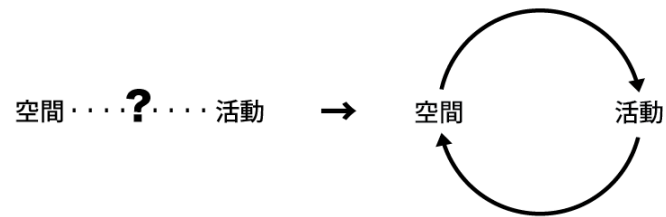
「わ」は古くから日本にある概念である。「わ」には二つの文字（輪・和）と三つの意味（循環・なごみ・日本）がある。この三つの「わ」に代表される日本のアイデアを活用したプロジェクトを行う。(図3)



(図3) 「わ」のもつ一つの発音、二つの文字、三つの意味

## 2-1. 循環 - 空間と活動の循環：「まちづくり」

「まちづくり」とは、日本で行われている都市再生の手法である。まちづくりでは、「空間」が「活動」を刺激し、また「活動」が「空間」を変化させるという「空間」と「活動」の循環・相互作用によって都市再生を行う。従来のように単に物理的な空間を設計・計画するだけでなく、そこで行われる人々の活動に積極的にかかわり、活性化させることによって空間自体を変化させ、またその空間が新たな活動の母体となる。(図4)



(図4) 空間と活動の循環

本プロジェクトでは、単なる空間の提案にとどまらず、「空間」と「活動」の双方に積極的な提案を行う「まちづくり」を目指す。

## 2-2. なごみ - 人々を迎え、つながりを生み出す活動

和み(なごみ)は日本の伝統的な感覚である。人々が集い、時間や物を共有し、憩うことで和みが醸しだされる。本プロジェクトでは、単なる商業目的の店舗ではなく、地元の人々が憩い、手作りの日本文化を共有する活動を通じて、Face to Faceのコミュニケーションが自然と生まれる和みの場所づくりを目指す。

### ・茶屋

茶屋は、日本において1100年頃から一般的であった休憩所である。旅人や街人に茶と和菓子などの軽食を出す店舗として発達した。街中にある茶屋は、ちょっとした時間に気兼ねなく立ち寄り、一息つける場所である。本プロジェクトでは、緑茶・抹茶・ほうじ茶などの各種日本茶と、日本の主婦の手によるお菓子などを楽しむことができる茶屋を提案する。



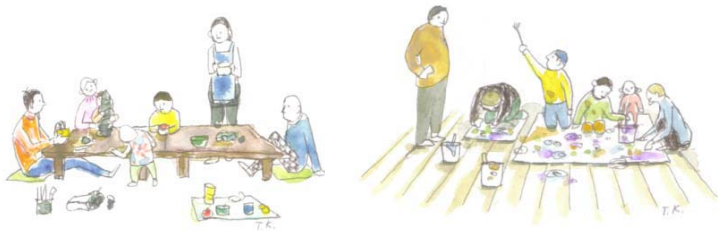
### ・ギャラリー

芸術家や職人による、手作りの家具・絵画・小物・染物などの作品の展示・販売をする。時折アトリエ・工房スペースを取り、モノが出来上がっていく様子と作り手の顔が見える場所を作る。

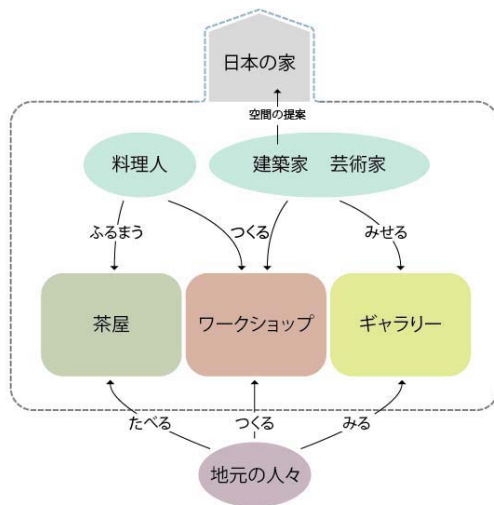


・ワークショップ&イベント (不定期)

月に一度ほどアーティスト・職人・料理人を招き、茶会、ミニコンサート、家具作り、アート、染物などのワークショップを開催することで地元の人々が日本文化と触れ合う機会を設ける。



これら三つの活動を通じ、建築家・芸術家・料理人と地元の人々が関わり合う「なごみの場」をつくる。(図5)



(図5) プロジェクトに関わる人々

参考：ワークショップ

コンセプト：

ドイツの「素材」と日本の「生活文化」を融合する試み

日本では昔から自然とともに生活する文化を受け継いできた。そのため、日本の生活文化には生活の範囲内にある物を用いて、人の知恵でその力を活かし、無駄なく使うという特徴がある。一方ドイツでは、BIO やエコロジーといった環境と人間双方に優しい製品や生活スタイルを選ぶ人々が近年増えている。このようなドイツにおける環境と生活に対する関心の高まりは、日本の生活文化と親和性が高い。地域に存在する伝統、自然、身近にある物に、日本の生活文化を融合することで、人々が地域資源を見直すきっかけをつくり、都市再生につなげる。

・具体例①：料理

概要

ドイツの食材を用いて、日本の家庭料理を作る

背景 (Why?)

- ・有機農法、地産地消、野菜ブームなど、安全で健康的な食生活を志向する人々が増加している
- ・ドイツでは寿司ブームなど日本食に対する関心は高まっているが、日本の家庭料理に触れる機会は稀有である

手順と人 (How?)

講師：日本のおかあさん  
 素材：ドイツの食材をなるべく用いる  
 レシピ(例)：肉じゃが【図】  
 →豚肉、じゃがいも、人参などどれもドイツで簡単に手に入る



肉じゃが

成果 (What?)

- ・日本の「母の味」を知ってもらう機会とする
- ・ドイツの食材にある新たな可能性を提示する

## ・具体例②：草木染め

### 草木染めとは？

野山で簡単に採取できる草木を用いて染める方法である。古来より日本で行われていた手法で、特別な機材や化学薬品を一切使わないため、家庭でも簡単に染めることができる。化学染料には出せない自然の色合いを出すことができ、近年日本では愛好者が増えている。

### 概要

ドイツで手に入る材料で、草木染めの手法を用いて染める

### 背景 (Why?)

- ・自然素材、手作りのものに対する関心の高まり
- ・近年草木染めが日本で流行している事

### 手順と人 (How?)

講師：草木染めに詳しい人

材料：羊毛、布、地元の植物

(例)

植物：西洋レンギョウ (Forsythie) → ドイツでとてもポピュラーな植物

藍 → ラオジツツ地方原産で日本の藍染めにも通じる

染物：毛 → 編み物

方法：染めたい物と植物を参加者に持参してもらい、一緒に染める。

羊毛でやる場合は、染めたあと編み物ができる人が編み物のワークショップを行う。



### 成果 (What?)

- ・地元の植物で手軽に染物を楽しめる事を提示し、手作りの楽しさと自然の色を再発見する機会となる
- ・地域の植物と素材に対する関心が高まる



藍 (ウオード)



西洋レンギョウ

## ・具体例③：講演、交流

### 概要

- ・人々の交流を目的とし、ある一つのテーマを通して互いの関心をより深める場を提供する
- ・日本の四季折々のイベントの楽しみ方を提案する

### 背景 (Why?)

- ・本プロジェクトの意義に参加者が触れる機会の必要性
- ・今日、地域を基盤とする人々のつながりが希薄になりつつある
- ・四季や地域性を無視した画一的な生活スタイルが広まり、環境や人間に負担がかかっている
- ・ドイツには Stammtisch という定期的にカフェやバーに集い、政治や文化について話し合う習慣が根づいている

### テーマ (How?)

- ・本プロジェクトやテーマに沿ったプレゼンテーション
  - ・アクション (社会問題に対する具体的な行動) と文化交流
- アクション・行事企画 (例)：「七夕」

日時：七月七日

概要：日本の四季行事の一つである七夕を通して文化交流を目指すとともに、忙しい現代生活で見失われがちなシンプルな過ごし方を提案する。七夕の紹介、短冊作り、飾りのついた笹の下で夕涼み。電気を点けず、提灯の明かりを楽しむ。

進行：七夕に精通する人、折り紙に精通する人

プレゼンテーション企画 (例)：「原子力エネルギーについて考える」

日時：広島、長崎に原爆が投下された八月六日、九日

概要：原爆投下という史実について知識を深め、今日の世界で課題となっている原子力エネルギー問題の考察を図る。

進行：日本人、プレゼンでは原爆投下に詳しい人を呼ぶ

### 成果 (What?)

- ・本プロジェクトの意義に参加者が触れる機会を設ける
- ・開けた場を通して人々の交流を活発にする
- ・四季折々という、エネルギー効率に良い知恵を活かし、楽しむ
- ・文化や生活、社会を見直すきっかけとなる

### 2-3. 日本 - 日本の空間

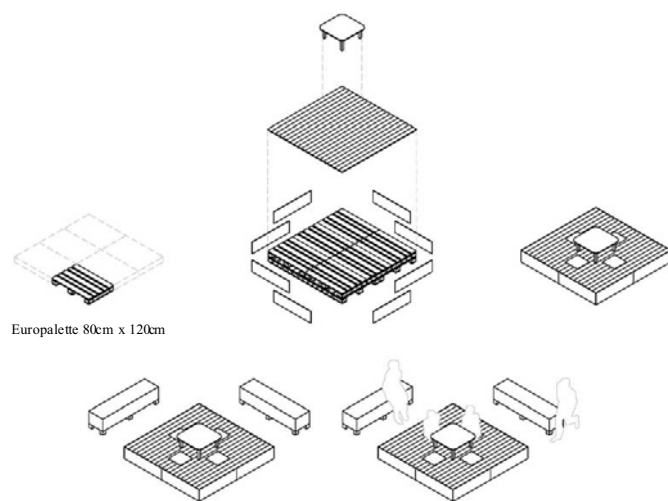
日本に昔からある座る文化・生活を基本とした空間を提案する。気兼ねなく休める茶屋・茶の間のエッセンスを取り入れる。

#### ・ユニット式日本の空間

本プロジェクトではパレットを用いて、図のようにどこにでも簡単に設置できるユニット式の日本の空間を提案する。元来、日本の空間を構成する要素は大変シンプルであり、容易にユニット化することができる。構造体には入手しやすいパレットを使用し、短時間で組み立てられるものにする。

このユニットを用いて空き家の再生を行う。空き家は物件によって内部空間が異なるため、組み合わせ方によって様々な空間条件に柔軟に対応できるユニット式が適している。また設置と移設が容易であるため、空き家の過渡的な利用としての「Zwischennutzung」に適している。

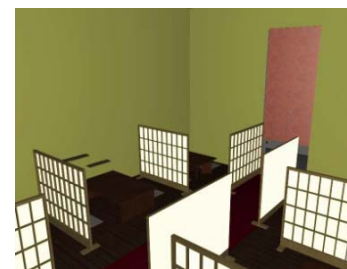
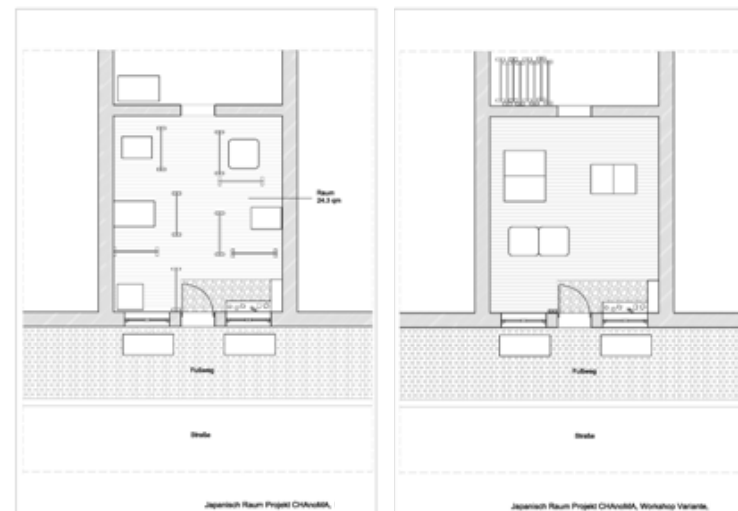
一方、歩道やオープンスペースなどの屋外空間に、ユニットを床机として設置することができる。期間限定で日本の空間を屋外に出現させ茶道などのイベントを行うことができ、人々の集う豊かな公共空間を生み出すことができる（図参照）。



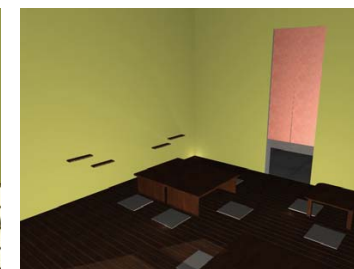
(図) ユニット式日本の空間

#### ・フレキシブルな空間

空間を壁で仕切るのではなく、衝立を置くことで、空間の中にもう一つ小さな空間が生まれる。この衝立は用途に柔軟に対応できる日本の空間の特徴の一つである。衝立で空間をフレキシブルに分節し、茶屋、ワークショップ、コンサートなど様々な用途に対応する。



茶屋時

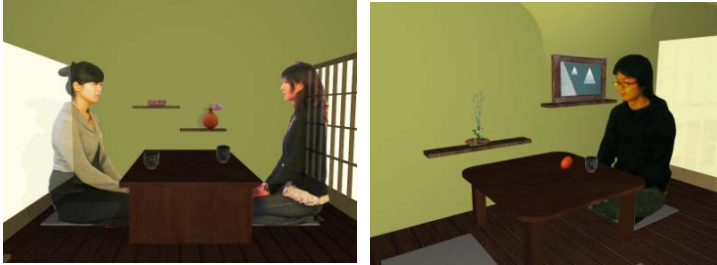


ワークショップ時



### ・視線

日本の住宅で1920年代から現在にいたるまで使われている、低いテーブル（ちゃぶ台）を用いることで、視線が低くなり、床に座った時の空間と日本的な緩やかな時間が体験できる。



### ・奥の空間

日本的な「奥」の感覚を提示する。



### ・外部空間

気軽に腰かけられる床机を外部に設置することで、内部と外部のつながりをつくり、人々を呼び込む。



### ・あかり

直接的な電灯の光ではなく、障子紙や和紙などを使い間接的な光をとすることで、空間に柔らかさをもたせる。





### 3. 企画者プロフィール

#### 大谷 悠 [Yu Ohtani] (建築家)

Email : yu.ohtani@gmail.com



#### 【略歴】

- 1984 東京生まれ
- 2007 千葉大学工学部デザイン工学科建築系卒業
- 2007-08 ベルギー Sint-Lucas ゲント校建築学科に留学(留学生派遣制度 AUSMIP より奨学金給付)
- 2010 千葉大学工学研究科建築・都市科学専攻建築学コース 修士課程修了  
渡独
- IBA Fürst-Pückler-Land にて研修 (Lausitz 地域の再生に関わる)
- 2011 ドレスデン工科大学建築学科客員研究員

#### 【作品・活動・論文】

『スキノ軍艦』卒業設計, 2007 (学内最優秀賞)  
 「成長する地中海観光と衰退する重工業-EU 広域化で目覚める中東欧都市と地域第2回」(共著)  
 『季刊まちづくり』学芸出版, 2009  
 『社会的再生の場としての「跡地空間」の可能性 -中東欧衰退重工業地域における都市・地域再生の取り組みを参考に-』修士論文, 2010  
 『Herzklang von Kraftwerk』 & 『PARADIESISCHES PLESSA』, 2010 (旧火力発電所の街 Plessa における光と音のインスタレーションの企画・運営・演奏)



PARADIESISCHES PLESSA 当日の様様と地元紙, 2010

#### 照内 孝明 [Takaaki Teruuchi] (建築家)

Email: chabudaidresden@googlemail.com

HP: <http://chabudaidresden.web.fc2.com/>



#### 【略歴】

- 1979 神奈川県横浜市生まれ
- 2003 国土館大学工学部建築学科卒業
- 2004 渡独
- 2005-06 ドレスデン工科大学 Gaststudent  
plan B architecture task force 参加
- 2006 rka architekten 研修
- 2007 Ader architekten 研修
- 2007.09- 現在フリーランスで活動中  
rka architekten, HANS Planungsgesellschaft  
TU Dresden Wissenschaftsarchitektur and etc

#### 【作品・活動】

- 2008 手作り家具製作開始
- 2001-2004 Tree House 製作
- Architektur Sommer Dresden 2006, 2009 参加
- PAO architecture Summer Camp 2005-2010 参加
- 多くの建築事務所設計業務



Tree House, 2004

Architektur Sommer Dresden 2009  
日本の空間のインスタレーション  
© plan B architecture task force

Oper Leipzig における茶室の提案, 2006  
© plan B architecture task force

**勝又 友子 [Tomoko Katsumata] (画家)**

Email: tom.ka517@hotmail.com



**【略歴】**

- 1983 東京生まれ  
2006 岩手大学教育学部芸術文化課程造形コース美術卒業（絵画専攻、教員免許取得）  
2006 - 2008 東京にてパートタイム勤務  
2009 渡独  
2010.10 - ドレスデン工科大学在籍（美術史専攻, BA）

**【展覧会】**

- 2010 「Tomoko Katsumata präsentiert ihre Arbeiten」（作品発表）  
geh8 Kunstraum und Ateliers e.V., ドレスデン（ドイツ）  
2006 「第32回青年美術展」東京都美術館内ギャラリー、東京  
「岩手大学美術科卒業展覧会 2006」岩手県民会館、岩手  
2005 「第58回岩手芸術祭」岩手県民会館、岩手  
「6人展」ギャラリーおでって、岩手  
「つくる展 2005」岩手県民会館、岩手  
2004 「global portrait」（個展）岩手大学図書館ギャラリー、岩手  
2003 「クロシロ展」岩手大学図書館ギャラリー、岩手  
「第29回青年美術展」東京都美術館内ギャラリー、東京  
「つくる展 2003」岩手県民会館、岩手



『敬虔なるもの』  
2010, 60×50cm, キャンバスに油彩



『無題』  
2010, 200×130cm, キャンバスに油彩

- 本企画書の作成にあたって、ご協力頂いた方々

Prof. Dr-Ing. Jörg Rainer Noennig (TU Dresden)  
Prof. Dr-Ing. Jürg Sultzer (Görlitz Kompetenzzentrum)  
Dipl-Ing.-Biol Anne Pfeil (Görlitz Kompetenzzentrum)  
Marte Stork B.A. (Görlitz Kompetenzzentrum)

Jochen Lenz  
Masaki Nishitani  
Kathleen Schnaars

**連絡先**

勝又 友子

E-mail: japanischeshaus@googlemail.com

All rights received©Das japanische Haus, 2011